

2. 留学生相談部門

留学生相談部門の活動対象は、1) 一橋大学に在籍する留学生、2) 留学生の支援や交流を希望する日本人学生、3) 留学を希望する日本人学生、及び 4) 留学生の問題を解決するために連携する教職員や地域社会の人々である。2007 年度の留学生相談部門の業務は、留学生センター相談部門教員（横田雅弘）と留学生センター兼務で各研究科に所属する留学生専門教育教員（商学研究科：阿部仁、経済学研究科：井村倫子、法学研究科：柘植道子、社会学研究科：河野理恵）が担当した。

留学生相談部門が提供する主に外国人留学生を対象とした教育サービスは、1) 学生の相談に応じ、問題解決を図る「相談活動」と、2) 学生の適応上の問題を未然に防いだり、異なる文化への認識を高めていく「予防・開発的活動」の二つに分けられる。相談活動の中心は、アドバイジングとカウンセリングであり、治療的な面接から情報提供まで幅広い活動が含まれる。主に留学生を主な対象とした予防・開発的活動には、a) オリエンテーション・プログラムやガイドブックの出版、各種チューター制度の運営など留学生の異文化不適應を予防する活動、b) 授業や見学旅行など、留学生の日本社会・文化あるいは大学制度への理解を促す活動、c) コミュニティによる生活支援を促進する活動、d) 学生国際交流誌『Bridges』の編集、また間接的なものではあるが、e) 教職員に留学生の現状を伝え、大学の受け入れシステムを改善する活動などがある。また、日本人学生を主な対象とした開発的活動には、f) 海外留学や留学生理解に関する授業の提供、g) 留学フェアの開催や TOEFL 説明会、ITP-TOEFL (学内で実施する TOEFL の模擬試験の開催)、および h) 「短期海外研修：国境・文化をまたぐ能力の育成プログラム」の実施（オーストラリア、中国）などがある。

1 相談活動

1) 相談室の時期、時間及び担当者

夏学期に対応した開室日は 3 月 26 日（月）～8 月 3 日（金）であり、冬学期に対応した開室日は 9 月 24 日（月）～2 月 8 日（金）であった。これらの期間の月曜日～金曜日の午前 10 時～午後 1 時、午後 2 時～午後 5 時には表 1 の担当表に基づいて留学生相談室を開室した。今年度も長期休暇中は午前 10 時～午後 1 時まで相談室を開室したが、表 1 に基づく担当ではなく、夏期、春期休業のそれぞれにシフトを作成して開室した。夏期休業期間の 8 月 6 日（月）～9 月 21 日（金）までの開室日 34 日間は、横田（15 日）、阿部（6 日）、井村（4 日）、河野（5 日）、柘植（4 日）が担当した。春期休業期間の 2007 年 2 月 12 日（火）～3 月 21 日（金）の開室日 30 日間は、学期中の勤務日数やその他を考慮し、横田（3 日）、阿部（7 日）、井村（7 日）、河野（5 日）、柘植（4 日）が担当した。

2. 留学生相談部門

表 1 相談室担当者の一覧

曜日	10 時～13 時、14 時～17 時
月	横田 雅弘
火	阿部 仁
水	井村 倫子
木	河野 理恵
金	柘植 道子

2) 来談状況の分類

① 相談件数と領域

表 2 は 2007 年度の月別来談状況、表 3 は相談内容別の分類である。一年間でのべ 1,261 件（昨年度 1,436 件）の相談を受け付けた。今年度相談件数が一番多かった領域は、昨年同様「チューター」（のべ 256 件、20.3%）である。これは、留学生と日本人学生によるチューター申込みの登録である。4 番目に多い「チューター・オリエンテーション」（のべ 101 件、8.0%）を含めて、チューター制度に関するものが全体の 28.3%となっている。これは厳密には相談とは言えないが、予防的・開発的な施策の一環として、また日本人学生の教育的な面ももつ活動である。チューター・オリエンテーションとは、チューター制度の有効性を高め、日本人学生と留学生のトラブルを防止するために行っているものであり、チューター候補者と留学生の両者を相談室に呼んで、『日本人学生の海外留学と外国人留学生との交流のための海外留学・留学生交流ハンドブック』をテキストとし、チュートリアル内容の確認、チュートリアル実施にあたっての注意事項、問題が起きた場合の対処などについて指導している。なお、留学生センターの日本語研修留学生につくチューターについては、日本語教育の訓練を受けている、もしくは日本語教育歴のある学生にチューターを依頼した。

経済に関する相談は次のように下位分類されている。奨学金相談などの「奨学金」（のべ 60 件、昨年度 68 件）、授業料の減免申請のためのサインを求める「減免」（のべ 135 件、昨年度 125 件）、そして奨学金申請のための「推薦書」（のべ 53 件、昨年度 53 件）である。奨学金に関するものでも、推薦書を実際に書いた場合には「推薦書」として分類している。アルバイトに関するものでは、「アルバイト」（のべ 7 件、昨年度 12 件）の相談と資格外活動許可申請のための「副申書」執筆（のべ 143 件、昨年度 118 件）が含まれる。以上、経済に関係する来談件数を合計すると、のべ 398 件（昨年度 376 件）となる。経済に関する相談内容は生活設計の建て直し、アルバイトや奨学金紹介などになるが、解決は難しいものが多い。心理的に追いつめられていることが多いので、話を聞いていくことでそれでも何とかやっていこうという気持ちをもってもらうことが大切である。話の内容には、どうして私は減免や奨学金がもらえないのかという制度や審査に対する不満が多くの場合に

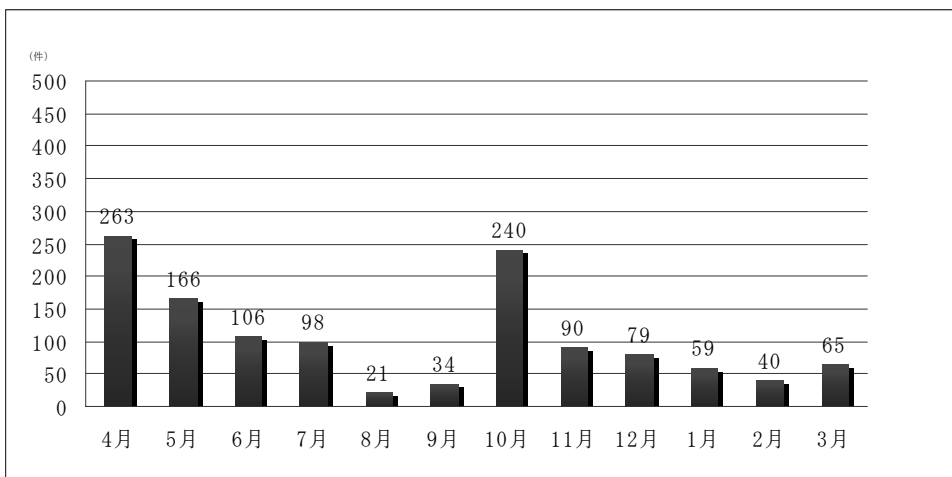
あり、じっくりと学生話を聞く姿勢が求められる相談事項である。中には、もともと入学時から、しっかりとした資金計画がなかったのではないと思われる事例もある。「その他」を除いてチューターの次に多かったのは「副申書」や「減免」であり、経済に関する相談が多いことが明らかである。

学内の国際交流・異文化交流誌である『ブリッジス (Bridges)』の編集会議や指示に関して来談した件数（のべ 24 件、昨年度 24 件）は相談ではなく会議参加であるが、留学生が原稿を執筆する過程で、自らの留学経験や異文化理解を省みるための一助になっている。2007 年度も 3 月に第 23 号を発行した。

健康の問題には、身体的な問題（のべ 16 件、昨年度 11 件）と心理的な問題（のべ 37 件、昨年度 25 件）がある。心理的な問題については、他の項目と比べると複数回来談するケースが多い。

教育内容とは、授業等の内容に関するものである。昨年度はのべ 82 件、今年度は 55 件となった。「留學生理解と国際教育交流」、「海外留学と国際教育交流」などの授業に関するものや、留学生担当教員が学部で開講している授業などに関するものである。本学学生からの留学相談は、昨年度のべ 69 件、今年度は 36 件となった。

表 2 2007 年度月別来談者のべ件数



2. 留学生相談部門

表 3 2007 年度 相談内容別来談者状況

相談内容	のべ件数	%
チューター	256	20.3%
副申書	143	11.3%
減免	135	10.7%
チューターオリ	101	8.0%
奨学金	60	4.8%
教育内容	55	4.4%
推薦状	53	4.2%
健康（心理）	37	2.9%
留学相談	36	2.9%
進学	34	2.7%
就職・進路	30	2.4%
会議	30	2.4%
履修	25	2.0%
宿舎・住居	24	1.9%
ブリッジス	24	1.9%
人間関係	16	1.3%
在留資格	16	1.3%
健康（身体）	16	1.3%
オリエンテーション	16	1.3%
地域	9	0.7%
生活	7	0.6%
アルバイト	7	0.6%
家族	5	0.4%
危機管理	3	0.2%
サークル	3	0.2%
行事申込	2	0.2%
言語	2	0.2%
保証人	1	0.1%
その他	115	9.1%
合 計	1261	100.0%

② 来談者別内訳（表 4）

表 4 来談者の内訳

来談者		のべ件数	%
留学生		847	67.1%
（内訳）			
学部生	340		
修士課程	213		
博士課程	45		
研究生	149		
センター生	23		
日研生	22		
交流学生	48		
学外	7		
日本人学生		243	19.3%
（内訳）			
学部生	149		
修士課程	76		
博士課程	6		
その他	12		
教 員		55	4.4%
職 員		32	2.5%
外 部		54	4.3%
地域		10	0.8%
その他		20	1.6%
総 計		1,261	100.0%

全来談者のうち、留学生による相談はのべ 847 件（67.2%）、日本人学生の相談はのべ 243 件（19.3%）、教員はのべ 55 件（4.4%）、職員はのべ 32 件（2.5%）、学外者（学生を除く）の相談はのべ 64 件（5.1%）であった。

留学生の来談者のうち、340 件（40.1%）が学部生である。学生総数では学部留学生は大学院留学生の約 4 分の 1 なので、この比率はかなり高い。学部の 1～2 年次生は指導教員がいないので授業料免除申請や奨学金などについての推薦を求めて来室すること、学部留学生はチューター制度を活用する人が多いこと、さらに大学院生はすでに日本で学部時代を過ごしている人も多いことなどが、学部生に相談が偏重する理由であろう。

修士課程の留学生の来談はのべ 213 件と留学生全体の 25.1%を占める。大学院重点化が完了して修士課程の学生数が大きく増加し、そのために奨学金の受給が難しくなって経済

2. 留学生相談部門

的な問題を抱える学生が少なくない。経済的に厳しい中で、単位の修得、修士論文の執筆、卒業後の進路と数多くの課題をこなす必要がある。心身の健康に関する来談が一番多いのが修士課程の学生である。

研究生の相談件数はのべ 149 件で、この 3 年間で最高水準となった。留学生来談者に占める割合は 17.6% である。修士課程や博士課程の入学準備期である研究生の訴える問題は深刻なものが多い。

日本人学生の相談件数のうち 61.3% は学部生によるもので、その比率は留学生の学部生の比率に比べても更に高いが、チューターのオリエンテーションを受けに来た学生の多くが学部生であること、教育内容や留学相談について来室した学生も学部生が多いことが主な要因である。それ以外にも、留学相談やブリッジスの編集に参加することから学部生の割合が高くなっている。

なお、相談室には本学の留学生、日本人学生の他に、教職員（のべ 87 件、総数の 6.9% : 教員 55 件、職員 32 件）からの相談や教職員とともに問題に対処するための相談がある。また、学外（のべ 64 件、総数の 5.1%）からの相談は、地域で留学生を支援しているボランティアが最も多いが、他にも行政機関の担当者、一橋大学受験希望者などからの相談がある。

2 予防・開発的活動

1) オリエンテーション・プログラム

4 月及び 10 月入学の大学院生、学部生、研究生、交流学生、日本語研修生（センター学生）、日本語・日本文化研修生（日研生）を対象に留学生オリエンテーションを行った。なお、留学生オリエンテーションに出席できなかった留学生については留学生相談室で個別にオリエンテーションを実施した。例として 2007 年度夏学期の学部学生と研究生のオリエンテーション・スケジュール（日本語）を下記に示す（表 5、表 6）。研究生のオリエンテーションと交流学生のオリエンテーションは英語でもオリエンテーションを実施し、センター学生のオリエンテーションは英語でのみ実施した。

表5 学部留学生オリエンテーション (2007年度夏学期)

★マーク＝必ず出席すること！

[illegible]

2. 留学生相談部門

表6 研究生等オリエンテーション (2007年度夏学期)

[illegible]

2) 異文化交流誌『Bridges』

『Bridges』23 号(編集長：柘植、副編集長：河野)を編集し、2008 年 4 月 1 日に発行した。今号は、表紙のデザインをシュ イチさん(現商学部 4 年)が担当し、国際的なイメージと異文化を象徴するものとなった。本号では異文化に対する理解を深めてもらうために、特集を「Embracing the Diversity：多様性を抱きしめて」と題し、多様な人々について、また、諸外国におけるサポートシステムと日本における問題を提示した。その他にも、地域の留学生支援、海外留学制度、留学生生活などを紹介した。

3) 学内留学フェア

日本人留学希望者へのガイダンス及び協定校紹介を目的とした留学生課主催の留学フェアを 4 月 25 日(水)に学内において実施した。交流協定校の紹介は交流学生及び帰国留学生在が担当した。なお、全体会においては学外から、カリフォルニア大学東京スタディセンター副所長の高橋香世氏、メルボルン大学エデュケーションセンターの山下妙子氏、アイルランド政府商務庁の Cronin Barry 氏、ケルン大学の Diana Hehle 氏をゲスト講師として招き、それぞれの大学、国、文化などについてお話していただいた。また帰国留学生の代表として、豪州のメルボルン大学に派遣留学された小林香織さん(社会学部)が留学から得た経験についてのスピーチを行った。

分科会においては各ブースに分かれての説明会が行われ、学生交流協定校 11 校のほか、ブリティッシュ・カウンシルとアイルランド政府商務庁が各国の大学の特色などの説明に当たり、河野が中国留学相談ブースを設けた。

4) 国際資料室のチューター

個別チューターとは別に、全ての留学生が気軽に日本語のチェックや講義内容の疑問点などを相談できるように、国際研究館 1 階の国際資料室にチューターが常駐している。近年は日本人学生の留学相談にも応じている。チューターは大学院博士課程の学生に依頼し、月曜日から金曜日の 10 時から 1 時、2 時から 5 時まで、留学生や日本人学生からの相談を受けつけた。担当者の一覧を表 7 に示す。一橋大学の常駐のチューター・システムに関する報告と分析は紀要第 7 号(井村倫子論文)、第 10 号(河野理恵論文)に掲載されているので、そちらをご参照願いたい。

表 7 国際資料室担当者一覧

曜日	氏名・所属
月	山本聡子(言語学研究科博士課程)
火	大原亨(商学研究科博士課程)
水	斎藤真琴(社会学研究科博士課程)
木	鶴田綾(法学研究科博士課程)
金	福地宏之(商学研究科博士課程)

2. 留学生相談部門

5) 留学生日本探訪旅行

昨年度から年2回の1泊2日のバス旅行の形式となり、教員のほか職員2名が引率に加わった。2007年8月8日～9日には長野～松本方面(35名参加、引率者：宮寄、井上、阿部)、2008年2月13日～14日には福島～会津若松方面(40名参加、引率者：花光、宮寄、柘植)にて実施した。

6) TOEFL セミナー

日本での TOEFL 実施機関である CIEE（国際教育交換協議会）を招いて、TOEFL セミナーを4月25日に実施した。主として、新 TOEFL である TOEFL-iBT や TOEFL-ITP の説明を実施し、35名の参加があった。

7) TOEFL-ITP

本学生協の協力の下、TOEFL-ITP を2回実施した。5月30日は47名、11月21日は14名が受験した。

8) 小平キャンパス国際学生宿舎における活動（国際学生宿舎指導主事）

小平キャンパスの国際学生宿舎では、国際学生宿舎指導主事（阿部）のもと、RA（レジデント・アシスタント）13名が居住者間の交流化を推進している。宿舎がオープンして6年目を迎え、留学生寮の組織運用がシステムとして定着し、留学生寮が「International Student Dormitory Association of Kodaira (ISDAK)」と命名され、小平キャンパスにおける住民交流とは何かについて住民代表で語り合う機会が何度もあった。これらの流れは、小平国際学生宿舎が基盤やしぐみ作りを中心に運営を行っていたサバイバルステージから、住民同士の交流に重きを置くステージに移りつつあることの現われである。こうした背景の中、国際学生宿舎委員会からの働きかけもあり、日本人学生と留学生が同じフロアに住む「混住プロジェクト」がトライアルとしてスタートした。

また、平成2007年度は留学生課が新規入居者を対象に発行する「小平国際学生宿舎ハンドブック」の改訂の年でもあった。留学生課、指導主事、RA、国際学生宿舎プラザ管理室、留学生フロアリーダーからなるハンドブック編集委員会によって、全面的な執筆、編集が行われ、2007年10月に読みやすく、使いやすいハンドブック（第4版）を発行した。

RA が中心となって毎月企画、実施する居住者間交流イベントは、以下の通り昨年度も活発に行われた。

- ガイダンス&ウェルカムパーティ（4月）
- 立川防災館 防災ツアー（5月）

- 一橋学園南口商店街 市民ふれあいフリーマーケット参加 (5 月)
- ISDAK 春のスポーツ大会 (6 月)
- 夏の海水浴ツアー in 横浜 8 月)
- ガイダンス&ウェルカムパーティ (10 月)
- ISDAK 秋のスポーツ大会 (10 月)
- 忘年会 (12 月)
- ISDAK 映画上映会 (12 月、1 月、2 月)
- 新年持ちつき大会 (小平市国際交流協会と共催) (1 月)
- 冬のスキーツアー in 草津 (2 月)

9) 短期海外研修 (オーストラリア・モナッシュ大学、中国・北京大学)

異文化社会、政治経済、文化に触れる過程で多角的な視点を身につけ、また「アウェーで実力を発揮できる自信」を体得することを目的とした「短期海外研修：国境・文化をまたぐ能力の育成プログラム」は、今年度もまた成功裏にプログラムを終了した。2007 年度のハイライトは、サイトに中国・北京大学を新たに加え、初回プログラムに 5 名の一橋大学生が参加したことである。また、3 回目の開催となるオーストラリア・モナッシュ大学には過去最大 35 名の一橋大学生が参加し、プログラムが定着していることを伺わせた。

平成 2007 年度のモナッシュ大学短期海外研修は 2 月 16 日から 3 月 15 日まで、豪州メルボルンのモナッシュ大学にて実施した。実際の現地での研修、ホームステイ、研修旅行等は、モナッシュ大学の一部門であるモナッシュ・アカデミーによって運営された。実施にあたっては、広報、オリエンテーション、ロジスティック面で UTS 国際教育センターの協力を得た。また、今回は本研修を埼玉大学、大阪大学、東京学芸大学の 4 大学合同コンソーシアム型で実施し、全体では 56 名の参加者があり、英語の能力別に 4 クラスに分かれて研修を受けた。本研修の最後には、参加学生が滞在中に各自がテーマを持って行った研究プロジェクトをまとめ上げ、英語での発表を行った。

中国・北京大学研修は、本学唯一の海外事務所である北京事務所の協力を得て、実施した。研修内容は午前中は中国語学習（北京大学プログラムに参加した他大学の学生を合わせ、約 90 名で中国語クラス 6 班が編成された）をメインに、午後は本学独自のアクティビティを実施した。その内容は、北京在住の OB による講義、中国人学生によるチューター補講、北京経済開発区見学、企業訪問、北京如水会との交流会、家庭訪問、北京大学の日本語学科の学生との交流会、市内観光などである。広報、オリエンテーション、一部のアクティビティの手配、そして現地アドバイザーは毎日コミュニケーションズの協力を得た。

2. 留学生相談部門

第1回目の参加人数は5名と少なかったものの、学生の満足度は非常に高く、次年度はより多くの学生の参加が予想される。

10) く に たち 地 域 国 際 交 流 ネットワーク と の 協 力

国立地域の複数の国際交流ボランティア組織が実施している外国人のためのサポート活動（日本語講座、ホームステイ・プログラム、生活相談等）に協力した。

11) 授 業

相談部門にかかわる教員が担当した授業は以下の通りである。

① 日本語研修コース

科目名（担当者）	コマ数	対象	授業内容	時期・時間数
異文化体験ゼミナール（横田）	2コマ／週	日本語研修生	講義や体験学習、見学などを通して日本社会の理解を深め、あわせて日本文化への適応スキルを習得する。	4月コース 10月コース 各60時間

② 全学共通教育科目

科目名（担当者）	コマ数	対象	授業内容	時期・時間数
まちづくり2007夏・冬（横田、林）	1コマ／週	学部学生	「教育と思いやり」をキーワードに国立市の富士見台地区の再開発を授業として実施した。（特色GP関連授業）	それぞれ 夏・冬学期開講 各30時間
留学生のための社会科学ゼミナールⅠ（柘植）・Ⅱ（阿部）	1コマ／週	学部学生	Ⅰでは、スタディースキル（ノートテキング、リサーチ方法、速読、レポート作成）を中心に大学生活に必要な基礎能力についての講義と演習を行った。Ⅱでは、留学生として大学生活を送る中で、1) 異文化に触れることでおこる自己成長について考え、2) キャリアプランの中に留学を位置づけることに取り組んだ。	それぞれ 夏・冬学期開講 各30時間
留学生理解と国際教育交流（横田・河野・太田・井村・柘植・阿部）	1コマ／週	学部学生	日本の留学生事情と国際教育交流の政策、異文化心理学・異文化適応について学んだ。	夏学期開講 30時間
海外留学と国際教育交流（井村、太田）	1コマ／週	学部学生	海外留学を希望する学生を対象にマクロな視点から留学を考えるとともに、自分自身の留学プランを検討し留学に伴うカルチャー・ショックと異文化適応について学んだ。	冬学期開講 30時間
ジェンダーと心理学（柘植）	1コマ／週	主に学部学生	ジェンダーが心理学の諸理論でどのように捉えられているのか、どのような研究がなされているのかに焦点をあて、ジェンダーと切り離すことの出来ない個々人の内省を促した。	冬学期開講 30時間

科目名 (担当者)	コマ数	対象	授業内容	時期・時間数
Introduction to Counseling Psychology (柘植)	1 コマ ／週	主に学部 学生	カウンセリング心理学を学ぶ上で 欠かせはならない倫理、資格を押 さえた上で、理論、カウンセリング スキル、心理テスト、精神病理学な どの基本を紹介した。	夏学期開講 30 時間

③ 学部教育科目

科目名 (担当者)	コマ数	対象	授業内容	時期・時間数
経済学部 基礎ゼミ ～カウンセリング入門～ (井村)	1 コマ ／週	主に学部 学生	カウンセリングの基本的な理論を 学びながら、心理的困難やストレス に自分で対処できるよう、様々な訓 練法を身につける。	冬学期開講 30 時間
社会学部 社会・人文の日本語 I・II (河野)	1 コマ ／週	対象は主 に学部 2 年、研究 生、日研 生、交流 学生	留学生センターが独自に作成した 教科書『留学生のための日本研究案 内』を精読する。論文特有の表現を 理解し、内容を的確に理解する。ま た、各分野における主要な概念や、 論じられている事柄の背景につい て基礎的な知識を学ぶ。	I が夏学期、II が冬学期 開講 各 30 時間

④ 大学院科目

科目名 (担当者)	コマ数	対象	授業内容	時期・時間数
総合社会科学日本事情 (社会学研究科) (河野)	1 コマ ／週	主に修士 1 年の留 学生、研 究生	特定の「日本人論」を取り上げ紹介 するのではなく、さまざまな「日本 人論」「日本文化論」をとりあげる。 それらを自分の身のまわりの日常 レベルから再検証し、批判的に考察 する。また、「日本人論」について の自分の研究的立場を明確にする ことが狙いである。	夏学期開講 30 時間
異文化間教育理解研究 I・II (言語社会研究科) (横田)	1 コマ ／週	修士の学 生	留学生アドバイジングについて理 論と実際を学ぶ。	I が夏学期、 II が冬学期 開講 各 30 時間
社会科学のなかのジェンダー (社会学研究科) (柘植：社会学研究科教員 12 名で担当し、内一回を担当)	1 コマ ／週	社会科学 大学院生 (研究科 共通科目 群)	この授業は、本学研究科の教員を中 心としたオムニバス形式の 12 回の 講義から構成される。それぞれの担 当教員の専門とする社会科学/人文 科学の諸分野のディシプリンと ジェンダー研究との研究視座の接 点を中心に解説を加え、両者を融合 させた学際的な方法論、研究テーマ の可能性を探る。	夏学期開講 30 時間

(文責、集計：阿部仁／編集：阿部仁・河野理恵・井村倫子・柘植道子)